
Private high school **慈律学園**

慈律学園長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P r i v a t e h i g h s c h o o l 慈律学園

【Nコード】

N 8 3 4 9 K

【作者名】

慈律学園長

【あらすじ】

私立、慈律学園とはテストの点数を通貨代わりにして住み込みの学園生活を送るという不思議な学校。

これはそんな学校に入学した主人公の物語である。

登場人物紹介

私立、慈律学園とはテストの点数を通貨代わりにして住み込みの学園生活を送るという不思議な学校。

これはそんな学校に入学した主人公の物語である。

登場キャラクター

主人公 住谷 勇渡（すみや ゆうと）

主人公で学費の安いこの学校に入学した。

メインヒロインに好意を寄せたりしながら学園生活を送る。
成績はよくない。

メインヒロイン 美島 凜（みしま りん）

才色兼備の主人公のクラスメイト

主人公や綾とは同じ中学校だった。

主人公の幼馴染 滝村 綾（たきむら りょう）

悪友。主人公と同じで成績はよくない。

ヒロイン 河井 玲菜（かわい れいな）

主人公達の小学校のころの同級生。

高校で再会した。

クラスメイト。

ブローグ「私立、慈律学園」

二月の下旬、まだ寒い屋外の外気を通り抜けて僕はある学校の門の前にやってきた。

校門の近くには私立慈律学園と書かれたプレートが埋め込まれていてそのすぐ隣に入試会場と書かれた看板が立っていた。

そこをくぐり抜けて指定された教室へ向かう。

そして試験が始まる、大事な入試だから頑張らないと。

…といっても実はこの学校は今年から設立された新設校であるため受験者が募集人数より少なく、倍率も一倍を下回っているのだから落ちることはないだろう。

ならばなぜ入試が大事なのかと言うとこの学校は特殊なシステムを採用しているからだ。

そのシステムがこの入試などのテストと深く関係している。

そう、そのシステムとはテストの点数をお金の代わりにしてこの学園内で自律しなければならないということだ。

1・波乱の入学

まず最初は国語の試験からだな、よし。

第一問、森鷗外の代表的な作品

『○姫』 空欄の部分を埋めなさい。

これは簡単だ。

そう思っ僕は空欄を埋める。

この調子で他のところも問いて行く。

これならいい点数が取れそうだ。

そうすれば入学後も苦労しないで済む。

住谷 勇渡 受験番号 1147 解答用紙

第一問、森鷗外の代表的な作品

『ものけ姫』 空欄の部分を埋めなさい。

それからしばらくして合格発表があつた。
もちろん落ちるはずもなく無事に入学が決定した。

そして入学式当日

いろいろな書類が入った封筒を校門前で受け取る。

そして校門をくぐった辺りで見慣れた顔を見つけ僕はすぐさま駆け寄った。

「やあ、綾じゃないか」

「お、勇渡かなんだお前も合格できたのか。お前みたいな馬鹿じゃ落ちるだろうと思ってたんだけどな」

く…僕と大して成績は変わらないくせに。

こう生意気な口を利いているのは滝村たきむら綾りょう。

僕の中学校時代の下僕……イテツ！

「誰が下僕だ」

そういつて小突かれる。

「心の中まで読まないでよ…」

彼は僕の中学校時代の親友だ。

「ちなみに下僕はお前のほうな」

……………親友だ。

「あれ？ 二人ともこの学校だったんだね」

後ろから良く通る明るい声が聞こえてきた。

「よお、美島じゃないか。お前もこの学校に入ってたんだな」

「うん。まさか同じになるとはね」

彼女は美島 凜。

明るく元気な僕の中学校時代のクラスメイトだ。
容姿は客観的に見ても主観的に見ても最高だと思う。

実際、中学生の時は何人もの男子に告白されたらしい。
しかし彼女はそれをすべて断ったという。

二人と話しながらクラス編成を見るとなんと三人とも同じクラスだった。

なのでその後も一緒に指定されたクラスに向かう。
ちなみに僕らのクラスは1 - Dだ。

この学校には1 - Aから1 - Gまでの7クラスがあって一クラスの人数は40人だ。

クラスに入るとすぐに久しぶりに見た顔があった。

「ねえ、あれ河井さんじゃない？」

綾に尋ねてみる。

「ああ、そうだな。おーい、河井ー」

綾が河井さんと呼ぶと彼女はこちらに歩み寄ってきた。

「住谷君と滝村君、それに凜ちゃんまで…同じ学校だったんですね」

彼女は河井^{かわい} 玲菜^{れいな}。

僕と綾の小学校時代の同級生だ。

「同じ学校になったんだあ。よろしくね、玲菜ちゃん」

「あれ、美島さんって河井さんと知り合いなの？」

「うん、ちよつとね」

どうやら彼女達もお互いのことを知ってるらしい。

これから意外と知り合いの多かった僕の高校生活が始まるうとしていた。

「おっと、そういえばみんな入試の点数はどうだった？」

入試の点数。

それは入学してから一週間の間、生徒に与えられるポイントで、これを利用して生徒は日々の生活を自分でやりくりしていくことになる。

だからなるべく多い方がいいんだけど…

「私は350点でした」

河井さんが答える。

テストは英数国理社の5教科だから平均70点というわけだ。
まあ良くも悪くもなく普通と言った所だろう。

「私は490点だよ」

「ええ！　すごいなあ」

美島さんはかなり高得点だ。

確かに中学の時はかなり成績も良かったらしいから入試でもこれぐらいの点数を取れたんだろう。

「二人ともすごいな。俺なんか70点だぞ」
綾が言った。

70点…

平均化すると14点。

すごく酷い点数だ。

こんな点数で無事に学園生活を送れるのだろうか？

「勇渡、お前はどんなんだ？」

「僕？　僕はえーと…」

入試で取った点数は校門をくぐる時に渡された封筒のなかにある紙に書かれていた。

『住谷勇渡　30点』

2・地獄の一週間への突入

「ねえ…、なんで綾と共同の部屋で生活しなくちゃならないのさ」

「そりゃあ俺達の点数じゃこれぐらいの寮じゃないと家賃が払えないだろ？」

入学式が終わった後、早速僕がこれから毎日を過ごす学生寮を決めることにしたんだけど…

僕と綾には点数が少ないから一つの寮部屋に共同で泊まることになった。

ちなみに一ヶ月100ポイントでそれを二人で払えばいいのだから実質50ポイントと他の一ヶ月300ポイントだとか500ポイントだとかする寮と比べれば格段に安い。

僕の今の点数じゃそれでも足りないけど…

でも支払いは月末だからそれまでになんとか点数を稼げばいいわけだから少しきついけど頑張っていくしかない。

「そんじゃ、明日に備えて文具でも揃えに行くか」

綾の提案で僕らは学園内にある文房具屋に向かう。

そう、この慈律学園では校内で販売されているものと学校から支給されたもの以外は持ち込み禁止なのだ。

つまり明日からの授業までにここで文具を買い揃えておかなければならぬ。

まずはシャーペンから見てみる。

シャープペンシル 1ポイント

これは普通に百円程度で売ってそうなシャープペンだ。
ということは1ポイントは100円ぐらいなのだろうか。

購入する商品をレジへ持っていく。

ポイントはカードの中に記録されていてそれを特殊な機械に通すことで精算する。

とりあえず僕が此处で購入したのはこれらの商品だ。

シャープペンシル 1ポイント

消しゴム 1ポイント

シャープ芯 1ポイント

ペンケース 2ポイント

ノート 1ポイント

勇渡 残り24ポイント

「綾、買い終わった？」

「ん？ ああ、必要最低限のものは買ったぞ」

そっとう綾の購入したものをしてみる。

「……消しゴムとペンケースは？」

「必要ない」

なんだと……それは必要最低限の中に含まれてるんじゃないのか!?

「ペンなんてケースがなくても持ち歩けるからな。消しゴムもシャ
ーペンの後ろについてるのを使えばいいだろ」

すごい根性だ…

甘かった。

僕の方こそもっと節約しなければいけないのに。

文具の購入を終えた僕らは寮に戻った。

「ところで今日の晩御飯はどうする?」

「カップ麺でも作ればいいだろ」

それを聞いて僕はカップ麺を買ってくる。

カップ麺 1ポイント

勇渡 残り23ポイント

綾 残り66ポイント

帰って早速カップ麺を作ろうとしたがそこで大切なことに気が付いた。

「そついえばお湯を沸かす鍋がないじゃないか!」

鍋がなくてはお湯なんか沸かせない。

「お湯入れてそのまま火にかけろよ」

むちゃくちゃなことをいうやつだ。

しかし仕方がないのでそうする。

容器が燃えないように長弱火で暖める。

しばらくして

「そろそろいいだろう」

綾が言い、カップ麺を食べ始める。

……まだ少し硬かったがなんとか食べた。
しかし絶対に真似してはいけないと思う。

そしてその日の夜は着替えもないので制服のまま眠った。
何もない木の床はとても寝心地が悪かった。

3・自己紹介

朝、目覚まし時計の音で目が覚める。

何もない床で寝たので体中が痛い。

ちなみにこの目覚まし時計は昨日綾が時計ぐらいは最低限必要だろうと格安な中古のものを買ってきた。

目覚まし時計 5ポイント

綾 残り61ポイント

「さてと、授業に行こうぜ」

「待つてよ。朝食はどうするのさ？」

「そんな余裕ある分けないだろ」

確かに僕らにポイントはあまり残されていない。
朝食は抜くしかないだろう。

そして今日は授業が始まる前にHRがある。
たぶん自己紹介等することになるのだろう。
何か考えておかなくては。

HRが始まる。

案の定最初に自己紹介が行われた。

「河井 玲菜です。宜しくお願いします」

「うぉー、大好きだ玲菜ちゃんー」

「玲菜ちゃん最高ー」

河井さんの自己紹介が終わると同時に男子からの一斉ラブコール。まあ確かに河井さんは結構綺麗だと思う。

そしてどんどん自己紹介は終わってついに僕の番まで回ってきた。僕は先ほどから考えていた自己紹介を語りだす。

「住谷 勇渡です。僕がこの学校に入ろうと決意したのはそう……冷たい雪の降る日だった」

僕のシリアスな自己紹介が始まると共にクラスのみんなは静かに僕の言葉に聞き入った。

「あの日、僕はある人に出会った。それは僕のその後の運命を大きく変えてしまう出来事だったんだ……。僕は追いかけた。その人の偉大な背中を。そして気がつく僕……」

「長い！」

ぐはぁ！ 綾に殴られた。

グーともパーともいえない複雑な手の形が高速でドライブしながら僕の後頭部を捉えた。

「どうして邪魔するのさ！ みんな静かに聞き入ってたじゃないか」

「あれは聞き入ってるんじゃないかって白けて呆然としてたんだろ……」

「そんなに言うなら僕よりも素晴らしい自己紹介をやってみてよ！」

「それはたぶん普通に自己紹介をすればいいってことだよな……」

そっぴいながら彼は普通に紹介を終える。

そしてまた自己紹介が進んで今度は美島さんの番になった。

ちなみに美島さんの席は僕の隣で綾は僕の後ろで河井さんは綾の隣となっている

「美島 凜です。元気なのが取り柄です。宜しくお願いしまーす！」

「凜ちゃん最高ー！」

「結婚してくれー！」

……どうやら男子が女子の自己紹介の後にラブコールを送るのはこのクラスの仕様らしい。

「美島さん可愛いー！」

僕も流れに乗って言うてみる。

すると美島さんがこっちを向いたので一瞬目が合う。

あれ……何だろっこの気持ち……

僕の中に一瞬不思議な感情は一体……

答えはCMの後！

「お前、こういうシーンを盛り上げるセンスないな」

「だから人の心の中まで突っ込まないでよ……」

4・授業開始

自己紹介を終えてその後HRも終わった。

そしてすぐに次の授業が始まる。

最初の授業は古典だ。

教室のドアを開けて初老の男性教諭が姿を現す。

つかつかつか…ガン！！

「ぐわあああ！」

教師がいきなり教壇につまずいてこけた。

その瞬間生徒の間に失笑が漏れる。

すると教師は何事もなかったように立ち上がると出席を取り始める。
なんて根性だ。

正面からいったんだぞ…正面から…

順番に出席を取っているところで僕の前の席まで順番が回ってくる。
しかし前の席には誰もいない。

この席は確か佐久間君の席だったと思う。

「佐久間君…：はいないみたいですネ」

「ちょっと待ったあ！」

突然、声と共に教室のドアが開け放たれた。

「佐久間君、遅刻ぎりぎりですよ」

「はい、すみません」

彼は佐久間 秀治君。

この学校で初めて知り合った。

彼は悠々と歩いて自席につく。

遅刻ぎりぎりなのにまったく息が上がってないがどういふことなのだろうか。

「それでは授業を始めましょう。まずは五十音図をノートに書いてみてください」

先生の指示によりノートに五十音図を書いていく。
これぐらいは僕でも楽勝だ。

「では書けたらいろは歌をノートに書いてください」

いろは歌か…

うる覚えだからあまり答えたくないけど。

「えーと…、誰を当てましょうかねえ。……では住谷君」

何で!?

解らないときに限って……

こうなれば綾に答えを聞くしかない。

そう思つて後ろを見る。

すると綾が先生の方を向いて僕を解りやすく指差していた。

こいつのせいか――！

僕が当てられたのはこいつのせいだった。

仕方ない…こうなれば自分の記憶を信じるしかない。

「いろんはがきをちりがみ交換、よだれたれそ爪ならむ。ウィー
ッスと言つて奥山君を今日飲みに行こうと誘つて、怖い夢みし麻痺もせず」

「とりあえずどこから突つ込んでいいか先生にはわかりません」

ちなみにこの日の放課後、僕はいろは歌を何百回も音読させられることになった。

「それではこれで授業を終わります」

挨拶を終えて先生は教室から出ようとする。

ガン！

と、またこけた。

随分とそそっかしい先生だった。

5 予習 1 + 1 は 1 1

「今日は散々だったなあ…」

僕はようやく古典の補習を終え、寮に戻っていた。

ちなみに昼食は僕も綾も1ポイントのおにぎり一個だ。

勇渡 残り22ポイント

綾 残り60ポイント

「補習受けるのが嫌だったら勉強するぞ。どの道勉強して次のテストでもっと点を取らないと本当にやばいぞ」

確かに次のテストでも酷い点を取ったらやりくりしていく自信がない。

今からでもテスト対策をしておかなければ。

というわけで僕らは勉強を開始する。

綾が教科書を持って問題を出す。

「じゃあまずは歴史からだ。卑弥呼が魏から貰ったものは？」

魏ってなんだっけ？

えーと、とりあえず魏からもらえそうなものは…

「魏志倭人伝！」

「それはたぶん貰ってないと思うぞ…ちなみにヒントは前半はゴールデンだ」

ゴールデン？

金何とかってことか。

それなら…

「ゴールデンボー。？」

「そんなものを貰ったらさらに印象的に歴史に残ってただろうな」

そして綾が次の問題を出す。

「次は英語だ。D o の過去、過去分詞、現在分詞形を答えろ」

「そんなの簡単だよ。ディドウ ドーン ドーイング！」

「D i d 以外は読み方が間違いだ」

そのまま呼んでもだめだって言うのか…
英語って難しいなあ。

「次は国語だ。『美しい』の品詞は？」

「美しい人が瀕死ってどういうこと！？」

「瀕死じゃなくて品詞だ…」

美しいか…

なんかうざいイメージだから

「ナル詞！」

「そんな品詞は無い。正解は形容詞だ」

「K・O・死？」

「お前は品詞というものの自体理解してないんだな」

綾は次に保健体育の教科書を開く。

「バスケットボールにおいてP・Gとは何の略？」

「ポケモン、ゲットだぜ！」

そんな感じで僕のテスト対策はある意味終わった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8349k/>

Private high school 慈律学園

2010年10月9日06時13分発行